
すべてあおかった。

藍野なお

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

すべてあおかつた。

【Nコード】

N3075P

【作者名】

藍野なお

【あらすじ】

すべてあおかつた。

そしてあの少女時代を、

私たちは思い出さなければならない。

blau (前書き)

ほんのりと、少女同士の恋愛を書いていきます。
本人達も、それを恋愛と気づかないほどに。
ほんのりゆったり、進みます。

すべてあおかった。

私たちは全てあおかった。

私たちはあおを統べていた。

決して濁ることを許さぬ、

唯全てのあおを統べていた。

そして私たちは仲間だった。

私たちはあおに括られた、

最初で最後の仲間で在った。

私たちは誰に偏ることもなく、

唯仲間として往こうとだけ誓っていた。

しかし私たちは既に往った。

それを露とも思わずに、

生きる者は生に往く。

それを何とも思わずに、

私たちはあおに居る。

すべてあおかった。

あおくないものなどなかった。

私たちはあおくないものを、

もはや統べてすらいなかった。

すべて、あおかった。

c h a r a k t e r (前書き)

人物紹介

character

高木美和 たかぎ みわ

十六歳 あお
空かった。

いつもノートと鉛筆を持っている。
何を書いているかは不明。

稲本佑菜 いなもと ゆうな

十七歳 あお
碧かった。

彩菜とは双子。元気な妹。
何を考えているかは不明。

洞口亮子 ほらぐちりょうこ

十六歳 あお
紺かった。

頭がよく、好かれやすい性。
何を好きなのかは不明。

凧佳織 なぎ かおる

十五歳 あお
水かった。

頭の悪い良家のお嬢様。
何を嫌いなのかは不明。

クラリッサ クラリッサ
Klarissa・シモーネ シモーネ
・Simone・ヘルツ ヘルツ
・Bertz

二十四歳 あお
緑かった。

頭の良い独逸の軍人。
何を知っているのかは不明。

稲本彩菜
いなもと あやな

十七歳
紫あおかった。

佑菜とは双子。静かな姉。
何を思っているかは不明。

長谷部真紀
はせべ まき

二十八歳
灰あおかった。

教師兼保健医の女性。
何を視ているのかは不明。

character (後書き)

character character

と、思われた方もいられませんか。

ですが、これで良いのです。

blau | 1 (前書き)

やっつとで本編に入ります。
期待せずにお待ち下さいませ。

すべてあおかった。

全て空^{あお}かった。

全てが空^{あお}の中だった。

そして私は水^{あお}と一緒に

私の統べる空^{あお}へ飛び込んだ。

その空^{あお}の中は、

すべてあおかった。

- - - - -

私が空を飛びたいと思い始めたのは何時のことだったろうか。十
二のとき・・・否、国民学校に入学する時には思っていたから、お
そらく六つするときだろう。そうならば十六の私からすると、丁度十
年前からということになる。十年間も思い続けているのに飛べない
ということとは、これから先も飛べる見込みは無いのだろう。何とい
うことだ。あの鳥でさえが空を飛んでいるというのに。

嗚呼、空を飛びたい。

だがしかし、十年一昔とはよく言ったものだ。たかが十年だが、
もはや百年に近いのではないかと思う。もしかすると私の感じてき
た一年は、他人からしたら十年なのではないだろうか。ならば人に

よって、時間の感じ方は違うのではないだろうか。少し前に、子と老人では時間の流れ方が違うという学説を読んだ覚えがある。あの学説では、どちらの流れ方がはやいのだったろうか。

嗚呼、思い出せない。

まあこんなこと、思い出せなくとも日常生活に支障はまるきりない。日常生活に支障があるのは、元素記号を思い出せなかったり、ドイツ語の綴りを思い出せなかったり、佳織のことを思い出せなかったりしたときだ。自分の精神が老いていくのを感じているからこそ、思い出せないことは恐ろしい。だからこうしてノートに残しているのだが、書き忘れていることも多い。そういえば私は佳織をいつから待っているのだろうか。一時間の様でもあるし、ついさっきからの様でもある。

嗚呼、早く逢いたい。

・・・

「さて、誰でしょう?」

いきなり後ろから手が伸びてき、私の視界を覆った。私は反射的にノートを閉じ、いつも通りの対応をした。

「か、おり」

「正解です！何で判るんですか?」

そんなこと、当たり前だろう。私は佳織を間違えたりなどしない。たとえ私が盲目でも、たとえ私が聾者でも、佳織だけは気配で判る。佳織もそれを解っているからなのかは知らないが、全く別の話を始めた。

「何で女だけなのでしょうね・・・」
「さあ、知らない」

佳織の始めた話、今この世界では、否少なくとも日本では男児が誕生しない。三十年程前に世界戦争が始まった途端、産まれてくる赤ん坊が女だけになったのだ。何故なのかは解らない。私にとってはそんなことどうだっていいことだ。しかし佳織にとっては重要らしい。佳織がこの話題を持ち出してくるのは、ノートに残っている限りでは五十三回目だ。

「女だけだと、危険じゃありません？」

「何が？」

「ほら、女だけだと、男が不足して同性愛が増えるじゃないですか！」

私が佳織のことを羨ましく思い、軽蔑するのはこういうときだ。今、男がいない所為で女も徴兵されている。しかし佳織は男がいないと同性愛が増えて大変、と考える。世間から見たならどこことなく奇抜な佳織は、私から見たならいい意味でも悪い意味でも魅力的だ。

「同性愛が増えても、別に構わないと思うが」

「えー、何ですか？」

「男が少ないのだから、取り合いになるだろう？」

「うー・・・」

「私は男に襲われるより、女に襲われたほうがよっぽど楽だと思う」

そつだ。男なんて面倒で仕方がない。それはここにいる佳織も同じの筈だ。だから、これでいい。変に何か言うよりも、これで十分だ。だから、これでいい。

何も言わずとも解り合え、しかし決して一緒ではない佳織と、私は

嗚呼、空を飛びたい。

すべてあおかった。

blau | 1 (後書き)

これは恋愛なのか、友情なのか。

どろだっていいことじゃありません？

b l a u | 2 (前書き)

ほのぼのしてるといいな、と思います
でも残酷表現有り(？)です

嘔吐有り

すべてあおかった。

全て紺あおかった。

私の紺あおの中には、

何かがずっと棲んでいた。

それはいつの間にか、

何かよりもずっと大きくて、

すべてあおかった。

まさか私が、女から惹かれやすいとは思ってもみなかった。

初めて女に告白されたのは恐らく六歳のとき。幼馴染のみっちゃん・・・中尾美空なかお みくに、告白された。今でも覚えている。自分の家で一緒に擬似家庭遊戯おままごとに投じていたとき、急に美空が立ち上がり、言った。「みくね、りょうこちゃんのことをがすきなの。りょうこちゃんりょうこは、みきのことすき？」その言葉は、私の中の何かと、恐ろしくらい共鳴シンクロしなかった。それは恐ろしいエコーとなった。「りょうこちゃんのごとがすぎなの。すぎいな。あおおお。りょうこちゃんのおとがあ、すぎなの。あおおおあおおお。りおあおおお

自分はそのとき、酷く吐き気を覚えて、その場に嘔吐した、らし

い。後で母親に聞いたことだから細部はとても曖昧だ。そのとき台所にいた母親によると、急に私の声がしなくなったことに気づき部屋をのぞいたら、私が吐瀉物に塗れているのを見、助けに入ったらしい。そして母は美空に罵声を浴びせ、家から追い出した。美空が引越して、その次の日から逢えなくなるとも知らずに。だがしかし、美空について感傷に浸る必要もない。美空の話はこれで止めにしよ

う。

その次の告白は国民学校高等科二年のとき、中等学校の先輩からだった。私は彼女にも、吐き気を覚えた。だがさすがに自我を保ち、告白を断ってから便所で吐いた。多分そのときから、私は軽い嘔吐恐怖症なのだ。他人の嘔吐は大丈夫だが、自分自身の嘔吐は決して許せない。何故だろう？きつと、私の中の何かの所為だろう。だがしかし、そんなことはどうでもいい。この男が極端に少なくなった世界で、同性愛が増えるのは致し方ないことで、仕方のないことなのだから。

だが問題は、今私が女に告白されたということだ。

そしてそのことに嘔吐感を覚えていないということだ。

「……え？」

その結果、私の返答は何とも頼りないものになった。

どうしたらいいのだろう。嘔吐感がないということは、私はこの告白を厭に思っていないということだろう。否、むしろ少し嬉しいかもしれない。なら何と答えたらいいのだろう。そうしていたら、告白主から話しかけてきてくれた。

「あゝ、だいじょぶ？つか、そうだよね。いきなり女に告られたら反応にも困るよね。ゴメンね」

告白主である稲本佑菜は、全く申し訳なさそうではない言い方で謝った。私はむしろそのことが、私の何かと共鳴シンクロし始めているのに気づき、驚いた。何故だろう。何故、佑菜と共鳴するシンクロのだろう。それは全くわからないけれど、佑菜に訊ねてみたくなった。

「佑菜は、私の、どこに惹かれたんですか？」

「？」

「私、はただの女学生なのに・・・」

「ああ、ん。どこに、っていうか、全部に？」

佑菜がいうには、中等学校の入学式のとときに、首席で話をした私に興味を持ち、ずっと見ていたらしい。そしていつの間にか好きになっただけらしい。そんな莫迦な。

「なんか、同級生が亮子の話をしていると、嫉妬してるってことに気づいてさ。うん。勿論断ってくれていいんだ。言ってきたかっただけだからさ。じゃあね」

「・・・何で返事も聞かずに帰ろうとしてるんですか!？」

そんな、私だって、佑菜のことが、

「好きなんですよ!!」

思いは、言の葉となって口から飛び出した。佑菜は振り返り加減で驚いている。私は恥ずかしくなって眼を逸らした。

そう、私もずっと佑菜のことが好きだった。いつも学級を中心にいて、幸せを満喫しているような佑菜に。惹かれていた。ずっと。自分とは違う佑菜に。

「本気？」

「……本気ですよ」

半ば投げやりにそう言うと、佑菜はこっちまできて、私に小さな接吻を落とした。そしてこう言った。

「やっと、言ってくれたね」

blau | 外 (前書き)

ちよつとした番外篇

下手な独逸語が出てきます

間違いがありましたら、教えて下さい ><

blau | 外

それは、第一外国語である独逸語の学習中のことだった。

いつも通り、長谷部先生は私たちに、独逸語で質問をしたのだった

「Wer ist das Mädchen, das Sie
m? gegen?」
「・・・はい?」

いつも通り、独逸語の苦手な佑菜に対して手厳しく

「Wer ist das Mädchen, das Sie
m? gegen?」

「え、えつと、何?」

「佑菜! せめて《tja》(えつと?) だよ」

いつも通り、亮子が助け舟を出してやって、

「なら、洞口さん。Wer ist das Mädchen,
das Sie m? gegen?」

「Nun... also, tja? (え・・・えつと、さあ?)」
「長谷部先生、どーいう意味でしょ? 好きな人でも聞いている
んでしょ?」

いつも通り、佳織が妙な茶々をいれ、

「まあそうね、凧さん。はい、高木さん、Wer ist das
M? dchen, das Sie m? gegen?」
「Das Mädchen das ich mag, ist

K a o r u .

いつも通り、美和が模範解答を返した。

「え、今私の名前がきこえた気がしましたよ??」

「そうね、凧さん。高木さんはK a o r uと言ったものね」

「ってことは、先生は好きな女の子を聞いてたんでしょっか?」

ただ、いつも通りでないことは、

「そっよ

先生の質問が少々悪趣味だったことだ。

- - - - -

微妙な翻訳

W e r i s t d a s M ? d c h e n , d a s S i e m
? g e n ?

誰 ですか 少女 あなたが 好きな ?

あなたが好きな少女は誰ですか?

D a s M ? d c h e n d a s i c h m a g , i s t K
a o r u .

少女 私が 好きな K a o r u です。

私が好きな少女はKaoruruです。

blau | 外 (後書き)

多分間違えてる・・・o y z

見逃す order 指摘 お願いします > <

b l a u | 3 (前書き)

近親愛接吻表現有

すべてあおかった。

全て紫あおかった。

そんな気味悪いほどの紫あおの幻影を、

唯一包んでくれたのは灰あおだった。

ただ唯一の誤算といえば、

その灰あおに包まれた紫あおは

すべてあおかった。

- - - - -

人が死ぬということを、私はつい此間まで理解していなかったのかもしれない。

私の祖母は私が十二のときに死んだ。家族の誰かが死ぬという経験を、有り難いことに私はその時までしていなかった。兵隊さんに駆り出されていなかった祖母は、心筋梗塞とやらに倒れ、布団の中で死んだ。最期に「わっしも、兵隊さんとこ行けっかなあ」といつて、綺麗な笑みで死んだ。という現場を私は見ていないのだが、佐菜が伝えてくれた。私の、佐菜。私の大嫌いな佐菜が。いつも媚を売らず、その天真爛漫さで学級の人気者。男にも女にも好かれる佐菜。大人にも子にも好かれる佐菜。でも、私だけはその心裏を知っている。そして、佐菜は鬼畜米英よりも性質が悪いと思う。祖母が

死ぬまではよかったのだ。まだ私は佑菜を知らなかったのだから。

いきなり祖母が死んで、国民学校で作業をしていた私に佑菜から電話がきて、「ばっちゃんが死んだ」と言って、そのまま先生に忌引きを伝えて、鞆もまとめず家に帰った。そして通夜に出て、次の日に葬式に出て・・・そう、葬式の時だ。佑菜を見てしまったのは。

家族や親戚や近所の人や知らない人や佑菜や私は黒暗い喪服を着ていた。家族や親戚や近所の人や知らない人や佑菜は泣いていた。私は泣いていなかった。それを何とも思わなかった。ただただ「いたい何がそんなに悲しいのだろう」と思っていた。今なら解る。私以外は殆ど皆、祖母の臨終に立ち会っており、また祖母との思い出も豊富に持っていたのだから。私は事実を享受していなかったのだろうと思う。否、今になって享受しても、私は泣かない。泣けないのだ。それはやはり、あの後にあつた出来事に起因しているのかもしれない。もう少し、もう少し思いをめぐらす。

葬式の後、家族や親戚や近所の人や知らない人は集まって、何かを話し始めた。「子どもはあっち行ってなさい」という母親の言葉に、泣き止んだ佑菜と泣き止むも何も無い私は内で双六に投じた。そうしていると、佑菜がまた泣き始めた。そして、胸の内を私にぶつけて来た。

「彩菜あ・・・あたしばっちゃんのこと好きやったのぉ」 うん、そりゃ私もそうだったよ。

「違う、ちがう、あたしの好きはm? genじゃなくて、liebe やったの」・・・え？

「晒わんとしてよ？あたし、ばっちゃんと性交したかった」・・・

男が少ないことで、佑菜がその手の事に通じていることはわかっていた。佑菜が、女しか愛せないことも。だが、佑菜がばっちゃんを好き・・・って、？

「彩菜、あんたはばっちゃんに似てるよ」急に真面目な顔でそういった佑菜は、私の手を掴んで彼女自身へと引き寄せ、私に・・・

私に……、

「大丈夫ですか？彩菜さん」

ふと気がつくところそこは保健室だった。そうだ、私は……

「私たちは専門的相談援助をしていたのよ？大丈夫かしら、今日はもう止めにする？」

長谷部先生が心配そうな顔で私を覗き込む。そうだ。私は一週間ほど前、長谷部先生に「人が死ぬってどんなことですか」と訊いた。すると長谷部先生は「彩菜さん……何かあったの？」と、この専門的相談援助を提案してくれたのだ。今日はその初問診日で、授業が終ってから保健室に来、おそらくの原因だと思われることを話していたのだ。

「ええ、先生。ちょっと……、はい」

そうやって私は保健室の椅子……鉄管椅子パイプ椅子ではないであろう黒い椅子から立ち上がり、「今日はありがとうございます」。そう言ってお辞儀をした。すると長谷部先生は「また、いつでも来ていいからね」と言い、夕闇に飲み込まれそうな校舎の中を玄関まで見送ってくれた。既に私たち以外の人は無し。下駄箱から沓を（靴ではない）取り出した。

「今日はありがとうございます。それでは、また明日」

「また、明日ね。彩菜さん」

そうお互いに言っただけは沓を履いた。そして私は玄関を出、絶対に長谷部先生には聞こえないであろう声で呟いた。

「……真紀ちゃん」

b l a u | 3 (後書き)

すべてあおかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3075p/>

すべてあおかった。

2011年2月13日05時49分発行